

丹羽文雄文学全集 第二卷
鮎 太陽蝶

丹羽文雄文学全集 第2巻

鮎・太陽蝶

一九七六年一月八日 第一刷発行

著者 丹羽文雄

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二丁目二二番一（郵便番号 一〇二二）
電話 東京〇三三九四五二二（大代表）・振替 東京三九三〇

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 株式会社小島製本所

定価は箱に表示してあります

落丁本・乱丁本はお取り替えいたしません

©丹羽文雄 一九七六年 Printed in Japan

(文1)



目

次

秋

.....

237

太

陽

蝶

.....

21

鮎

.....

7

贅肉……………257

無慚無愧……………283

創作ノート……………389

装幀 辻村益朗
(写真・一九五二年、母・こゝろ)

丹羽文雄文学全集 第2卷

鮎・太陽蝶

鮎

一

海棠と夕顔に雨がふっていた。俵屋が母の和緒の手紙をもってきたので、津田は朝からの苛立つしよざいなさを吹きとばす気で家を出た。電報で東京から呼びよせられて来たが、肝心の和緒がうちを開けはなして何処かに姿をかくしていた。大変間尺にあわない昨日来であった。

長良川が軒下にながれているある料亭のはなれに和緒はいた。津田が熊笹の庭を渡っていくと、和緒は障子をあけた。いつものように陽気なほほ笑みだったが、どこかに元気がない。元気がないかと、少しぐいと来るものを感じて津田は目を大きくした。それで母と子の挨拶になった。

「朝はね、もう少しのところで守山と喧嘩するんですよ」

笑いながら、しかしその語気は刺々しかった。刺があるので、まだまだ朝の余憤がのこって、自分はまだ慍っているのだという気が津田はした。

「籍をね、わたしの籍を守山が、守山家へいれてほしいと言いだしたんだよ」

「結構じゃありませんか」なんだ、そんなことかと安心するものがあつたが、それはそのまま押し殺して、「電報はそのことですか」こう言つたとき津田は、まるで慍つたようにぶつきら棒であつた。内心、これは本当に結構なことではないか、と座布団におさまつた。

が、和緒してみると心外だつた。自分の考えに味方をし、力づけ、助けになつてくれるであらうと津田を頼みにこそすれ、まさかこうはつきり逆らいはすまいと当てにしていた思惑がいつべんに叩かれて、もう胸いっぱいになつて来る顔を暫く津田の前にじつとさせ、それから言つた。「いやだよ。いやだよ。誰がなんと言おうと籍は移してやらないから——」

唇を歪め、泣きだしそうな瞬きを二つ三つする。張りのあるその眸に力を籠める風だつた。そうでもしなければ、和緒は津田に言い負かされる怖れがある。津田は和緒のそばにうつちやられた「主婦の友」と、「映画と演芸」の極彩色をちよつと眩しうに眺めやつた。

「誰がいま更入籍なんて素直にうけてやるものかね。そうだろう。守山も考えなおしてみるがいいんだよ」と和緒は少しこわい顔をした。

津田は自分が叱られに來たような氣持であつた。

「何と言われようと移しちややらないよ。断るんだよ。きっぱり断るんだよ。わたしはここを一步も離れやしない。え、動いてやるものか」

この春、守山から津田のところへ、和緒にいい縁談の話があるがどうかという風な手紙がきた。津田はこうした問題になれていないので、どうしてよいか途方に窮した。

投出した気ですぐ返事を出し遅れてしまうと、今度は和緒から、守山が何を言ってきたても返事をしてはいけないと手紙が来た。それで安心して捨て置いて置いた。守山はいま経済的に行詰っているから自分との関係をきりたがっている。が今きかれてはこちらが困る。もう少したてば暮らしの方法が立てられるからと言う母の文面だった。和緒は池の坊の師匠の腕をもち、裏千家の、これも教えられただけの素養がある。現に四、五人の娘に教えている。その方面で成算が立つのであらう。

津田はこれで十数年来、和緒と妙な境遇にいる。当時やっと小学校に通いはじめた津田をのこして、和緒はある旅役者を追った。その後、一の宮、名古屋、加納を転々として、守山の世話をうけ岐阜に落着いてから数年になろうとする。和緒はまだ四十二歳、津田は十七の時のひとり子である。津田は小さいときから母のない人生に慣らされているので、母をさほど必要としなかった。一年にこの母と子は五、六度逢う。まちがっても和緒は自分の生活を津田に

話さない。話されないから津田も持前のひねくれた気遣いで、よしその気ならと非人情に、だから津田の態度は母の日陰ものを認め、安んじているかのような形であった。安んじて、——この言葉には文句はあるが、肯定してもいい津田の気であった。

そこへ、守山の細君が亡くなった。すると如何にもその時を待っていたといった風に、守山が籍云々をもち出した。

和緒は津田に言うのである。

「この春のことをあの人も思い返すがいいさね。どの顔さげて、と言いたいところじゃないか。守山ったらね、信太郎、奥さんがもう駄目だと言われるようになってから急に、様子が熱つくくなって来て、しつっこいたらありやしないの。えげつない位、てれくさいったらなかったよ。本当にわたしはもてあましたよ。まるで獣みたいに、夜も昼もみさかいがつかないので、女中の手前、出入りする娘さんの手前、わたしは何度頼い顔をしたことだらう。恥しいったら、男も年をとると、することなすことが露骨で、脂っこくってね——」

もし世間の健全な人々がこうした言葉を生みの母の口から聴かされる場合、聴手はいったいどんな顔をして聞くべきものか、と津田は考えた。するとこつんと来るものがあった。津田は苦笑でごまかした。

まず、守山と言う人間は――、

「わしは気が短い。いつもあとで後悔しているほど気が短いんだよ。かっとなると、何をしてくすか判らない。時どきそんな自分が怖ろしくなる。だからもしお前がわたしを裏切ろうものならわしはきつと骨身に応えるほどお前に思ひ知らしてやるだろう。何も今更信太郎さんの意見をきくまでもないんだから。そうだ、わしの顔に泥を塗るような真似をしたら殺しかねないよ」

と言つてのける性格なので、和緒はすっかり震えあがつたのである。全く殺しかねない守山であつた。

だから、早速和緒は逃げだした。発見されたら殺される気で、かくれた。そして津田に電報をうった。

津田が和緒の家についたとき、雨がふっていた。守山が疲れた人のように、雨の脚を眺めて頑張っていた。津田が挨拶すると、

「あまり和緒を唆(そ)かさないでほしいよ」と頭からだつた。

守山にしてみると、説明の煩瑣(はんさ)をはぶいた訳である。が津田はなにも母から今度の報告をうけていない。母の留守にも深い理由を嗅ぎだせないのである。津田は静かに、どうして自分がそんな悪者であるような言い懸りをされなければならぬのかを訊ねた。

「困るな。こんな場合にしらっぱくれて、お互の気持を悪くするだけだからね」

津田は重ねて呆然(ぼうぜん)とした。

「まあ三人で逢い、ゆつくり相談するより仕方がないよ。この場合肝心の和緒がいなくては始まらないよ。あんただけでは心細い問題だからね」

語尾を苦笑に収められた瞬間、津田はぐいと怵(おそ)える気持でいっぱいだつた。がわずかに、和緒の五年間の生活を思い返し、蒼くなるだけで済んだ。津田は平常、自分でも十分気がながいとは言えないからである。――

母親は言う。

「それで、お前はどうお思いだい。やっぱわたしは守山へ入籍するのが本当なのかしら。あそこを死場所と定めて、生涯をきめてかかるのが本当なのかしらね」

やるせない表情をする母を眺めて、このときの津田は少しほかごとを考えていた。津田は母の十七の子供であることを思い出している。まるで姉弟だ。人一倍大きな自分には小柄な和緒は姉の形である。かつて母と子は柳ヶ瀬を歩き、和緒が若い男と一緒だつたと噂を蒔いて守山をやきもきさせ、それをしんから和緒は可笑しがつたが、津田はそれだけではすまされない苦い水を感じた。母と子の差別の具象化だ。津田はいつも十七からの母の役割を気の毒に思っている。津田は小さなころよく泣いた。泣いて泣きやまない、どうしてあやしてよいものか、心細くなつて十七の母は、津田を膝にのせてああんと一緒に泣きだしたもの

である。すると姑は、まず小さな母親からあやしにかからねばならなかった。

津田は応える。

「こうした問題は一時的感情できめるのは危険ですよ。守山の人格は第二のことでしょう。将来のどうせ母さんと一緒になれない僕たちの世間もよく考えて、母さんの老後の安定と言う物質的な立場から、いくらか狡くこの問題は極めるべきでしょうが」

「それで、お前の考えは」

「母さんの気持が肝心ですよ」

「いいえ、お前の意見では——」

「母さんは」

こいつは狡いな、と自分を感じた利那、和緒は突然両手をつッ張り立上ってきた。不意だった。津田はひとたまりもなくどしんと床の方へぶっ倒れた。

「この薄情もの。親にむかって何という情知らずをお言いだいい。薄情もの奴、卑怯者——。負けはしないぞ。言い負かされはしないぞ。くそ、敗けてなるものか」

全く防ぎようがなかった。和緒の小さな拳固が、津田の鼻さきをつづけさまに飛ぶ。腕を烈しく上下させて母はぜいぜい息を切らした。津田は一度、したたかに曲った自分の鼻を感じた。

「そんな無茶な、そんな無茶な——」

こう言って津田は、自分の顔の上にかむさつてくる和緒の体の崩れるのを支えた。

「お前はこんなとき、わたしを責めるんだ。今まで何言わなかったけど、腹の中ではしょつ中わたしを虐めどおしていたんだらう。そうだらう。だから今となって、ひとが落目になったからって——」

胸倉をとらえ、小突きまわす和緒の腰に、津田は両手をあてがっていた。潤んだ眸を見かえして、あながちこの母を虐め通してきたのではないが、まんざら虐めなかったのではないと思った。

「誰が負けてやるものか。負かそうなんて薄情だよ。情知らずだよ。わたしはこれで、誰にも頭を抑えられてはいないんだ。——なんだ、その頭髮をわけて、偉そうに、柔道二段だってちつとも怖かないよ」

津田は静かに居ずまいを直す。そして、世にも情ないという顔をして、

「ぼくの言い方が気にさわったら堪忍して下さい。ぼくは寧ろそう考える方が、いちばんいいんじゃないかと思つたんですが」

と言う。しかし凡そ、詫びるという気持とは相違して母の顔を眺めていると、朗かな当惑感がごろごろと津田の胸の中をころがるようであった。何か、やわらかい肉感的な当惑である。

「後生だから、ね、信太郎、そんな風に言わないでくださいよ。わたしのして来たことは確かによくなかったよ。それは十分分^{わか}っているよ。でも、今となって責めるなんて、あんまりだよ。あんまり非道^{ひど}いよ」

眸が光り、濡れてきた。そら来た、と逃げる気持で、しかし泪はやはり痛かった。がこれで、母の発作も運びよせられる処まで行きついたと考えた。その出鼻へ、いきなり「主婦の友」が飛んできた。雑誌は津田に身をかわされて、模^も糊^ことして山静かなり花の山という掛軸につき当たった。津田はすぐ、まるで子供に玩具を拾ってやるという風に雑誌を拾いにかかる。すると、和緒が膝をつめてきた。そんなもの静かな、動じない津田のようにすに腹を据えかねるのである。

「わたしはこれでも、今日の日まで気の休まるという時はなかったんだよ。お前を捨てて家出した罰はもう十分にうけているよ。もう沢山すぎるほど苦^{くる}勞^{らう}して来たよ。長い間だったよ。その間には、もし自分さえその気になるならわたしは何時だって幸福になれたんだよ。暢^{ちやう}氣^きをしようと思えば、いくらでも太平楽がきめてもられたんだよ。何のためにわたし^{わたし}が今日まで苦しんできたと思いいないの。みんな子供が可愛いからじゃないの。お前さえ初^{はつ}から捨ててかかる気だったら、母さんはどんなにも結構な身分になれたんだよ。それが判^はんないのかい。大学校までいって、そ

んな親の切ない心が読めないのかい。親にむかって偉そうに意見するのが子供じゃないよ。わたしはお前が可愛いから白を切^きって守山へ行けないんだよ。もしわたしが守山の人間になつてごらん。一年に五、六回しかお前に逢いたくても逢えないのに、それ以上はたの人達に気がねをして、思うように逢えないじゃないの、今だって、母さんは、逢いようが少^{すく}ないと思^{おも}っているのに。——それも、先にお前と一緒にされる見込みがあるのなら嬉しいよ。でも、お前には異^いつたお母さんがある。一十月とお前とわたしは一緒にお言^いいなのだい。ここの道理が、こんなこと位判^はんないのかい。分^わつていても分らない顔をして。そうだよ、お前はまだわたしを虐^{なぐ}め足りないと思^{おも}つておいでだろう。さあ、はつきりと言^いつてごらん。母さんの口からこんなことまで喋^{しゃべ}らせて。さあ、言^いつてごらん。はつきりと応^{こた}えてごらん。人を虐^{なぐ}めるにも程があるよ。ひとが落目^{らくもく}になっているのにつけこんで——、ええ、口惜^{くし}しいよ。口惜^{くし}しいよ」

津田は、がんとうちのめされた。母に対するこれまでのいろいろな気持の痛手や、淋^{しみ}しさ、やるせなさがいっぺんに蘇^{よみがえ}つてきた。ひねくれた持前の虚弱^{じじやく}さが、洗^{あら}いたられたような気がした。吊^つしあがった可愛い眼もとから、泪^{なみだ}が堰^{せき}を切りぼろぼろと落ちて来た。泣^ないている母はまるで子供だ。そんな子供々々した母が、津田は訳もなく好きに

なるのだが――。

その時である。庭石をこちらへ近づいて来る誰かの足音がした。津田は母の手をとると、

「さあ、早く顔をふきなさい。ここはうちじゃありませんよ。ほら、誰か来たじゃないの」

しかし和緒は濡れたままの顔を、やがて開くだろう障子の方へぼんやりと向けていた。黙って顔を見せたのは女中だった。

「遅くなってすみません」そう言って女中はすぐこの場の変な空気を嗅ぎつけたように、

「あとはすぐ只今――」早々に引下っていった。

鮎の魚田である。盥洗の水が場所ちがいのように揺れていた。途中にはいられて、津田はやれやれと思うのであるが、

「お前はいつもわたしを黙って眺めていたね。それが怖かったよ。何よりも怖かったよ」

「そうですか」と、津田はちよつと目のやり場を探した。

「母さんの心に、そんな考があるとは考えてもみなかったのです。浅薄でした。今まであまり子供らしくなく、非人情ふつて、生意気でした。これからは決して母さんを虐めませんよ。何とかいい方へ向けましよう。これからはぼく、大いに努力しますよ」

誇張したものの言い方も、仕舞いには実感をもって来、

津田は晴々しい気になった。

「さあ、お飲みよ」

酒は富久娘、生一本、母のお酌で盃をあけた。

「誰だつてわたしの様な運命を望みはしないよ。でも、一度足の向き方がまちがってしまつと、容易に真直にはもどてくれないのだよ。気ばかり焦つてね。もつとも女のひとりぐらしがどういふものか位、お前にはよく判っているだろうけど」

「判りますよ。しかしその判り方が、母さんの思い通りな判り方でなかったからつて、判つてない訳じゃありませんよ。母さんの不満はこの解ると言うことの客観的なのと、主観的なとの相違にあつたような気がするんだけど」

餉台の端が気短かにちよつと鳴つて、母は再びこわい顔をした。

「もつと身入れて――」

「はい」と応えた津田は、「入れてますよ。親のことじゃありませんか」と笑つた。

「それでいて籍を入れろとお言いかい」

和緒の口調は鉄のように固く、冷やかであつた。津田はとうとうしてやられたような気がした。が刺を覚えないうつて、また何事も逆らうまいと思つた。この母には賛成だけが必要なのである。津田は言つた。

「守山のことは、何とか解決しますよ。併し、手切れにど